

「骨の戦世」で憶う事

福井崇時 2011. 2. 3.

岩波ブックレット No. 796

フォト・ドキュメント 骨の戦世 65年目の沖縄戦

比嘉豊光、西谷修 編

此の本を手にして私の胸と頭の中に埋もれていた沖縄戦への憶いが現れ、そして精神が深い淵に揺さぶられながら落ち入って行くような感覚に強く捕われた。

1975年12月琉球大へ集中講義に行った時、首里の丘の守禮之門をくぐり校舎へ行く道で、首里の何処かの戦線で戦死した兄を思い出していた。大阪の役所から来た「遺骨」の箱には小石が一つ入っていた。沖縄戦の激戦では戦死者の遺体を収容する余裕などある筈がないと想像していた。この私の胸と頭の中に埋もれていた沖縄戦への憶いが現れたのは、岩波ブックレットの写真-那覇市地域開工工事のブルドーザーで掘り起こされた地面から出た日本兵の骨の写真-を見た時である。

私が那覇へ行った1975年では、兄達の部隊や多くの部隊の殆ど全員が戦死した首里の激戦跡は既に土地は整理されていたから、兄達の骨は土砂や瓦礫と共に均されて米軍の基地や兵舎や首里付近の町並みと道路になっている何処かに埋もれているに違いない。写真のように現れた遺骨は、ある意味で、幸福である。ブルドーザーで粉々にされる前に無事に掘り出されたからである。私が強烈な思いと抜き差しならぬ感情に取り付かれたのは、頭蓋骨から化石化したと思われる脳味噌が転がり出たと云う写真である。説明されているように、それは何かを訴えていると思われる。

この本の宮城晴美の「ある“一兵卒”女性の戦中・戦後」に、彼女の母より一才年上の知人-夫は海戦で戦死-が那覇港へ国内クルーズで寄港したので那覇を案内しようとしたが、彼女は船中に留まり「戦争で亡くなった人たちを足で踏みつけるようだし、少しでも傷つけると地面から血が出てくるようで、いたたまれない」と誘いをやんわりと断った、と書かれている。

また、芝憲子の「骨のカチャーシー」に

でも俺たちはいつまでもここにいる
殺したやつらを忘れないために
簡単に拾われて

ここで殺されたと証明するために
やつらが今何をしているか知るために
神社にまつられたりしない

沖縄に埋もれているもの、戦死者の骨と不発弾（戦死者と同じくらいの島の住民の骨も）。

まだまだ沖縄戦は終わっていない、覚めない悪夢のように続いている、と書かれている。

国、政府、は硫黄島で戦死者の骨収集作業を立ち上げるとのことだが、沖縄では既に沖縄戦戦死者の九九％は国立沖縄戦没者墓苑に納骨されていると言うが死者を特定せずして骨を灰にした。そして戦死者の骨収集作業は終わったとしている。しかし、多分兄達の骨は拾われる事もなく開発された土地の下に眠っていると思われる。首里での日米攻防戦は、沖縄戦史上、最も熾烈で、米軍戦史で「ありったけの地獄を一つにまとめた」戦闘だったと記述されている。戦跡の広い土地の下の何処かに粉碎されて眠っている骨達には、まだ沖縄戦は終わっていないし終わる日は来ない。

私の精神が暗い深淵から浮かび上がるには相当な時間が必要と思っている。